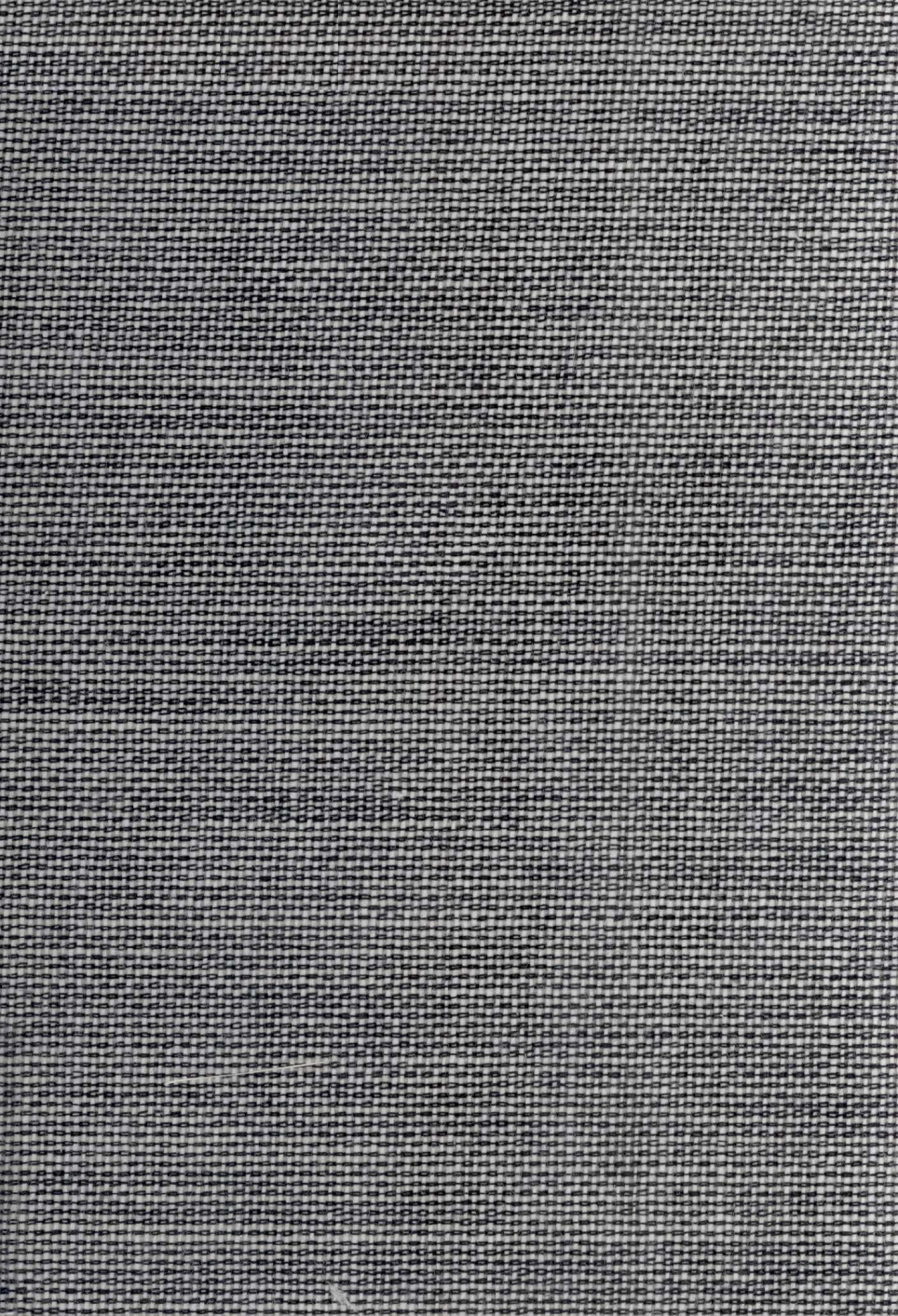




續高見順日記

才一巻

勁草書房

続 高見順日記 第一巻

1975年 5 月 30 日 第1刷発行

著 者 高 見 順

発 行 者 井 村 寿 二

東京都文京区後楽 2-23-15

印 刷 者 山 田 博

東京都板橋区高島平9-13-7

発 行 所 東京都文京区 株式会社 勁 草 書 房
後楽 2-23-15

落丁本乱丁本はお取りかえします。

© 1975 Jun Takami

*定価は外函に表示してあります。

三陽社印刷・牧製本

Printed in Japan

0395-881000-1836

わが
文壇
生活
一

昭和
三十五
年

二月一日

本日よりまた日記を書こうと思う。(凡書房版「完本・高見順日記」の校正を読んで、このことを思い立った。)

風邪気味で、昼すぎまで臥床。

一時の電車で上京。二時半より講演(文春、徳田雅彦君に頼まれ、三共製薬労組での講演)のつものところ、電車のなかで「文春手帖」を見ると、「二時半より二時半まで」とある。おどろいて――新橋よりタキシードを飛ばし、三共へ行くと、労組の会は大井町の文化会館だという。徳田君に電話、クラブで三共の人と会って会場へ。

四十分、講演。

五時よりペン(註||ペンクラブ)例会。

アラスカで。アースキン・コールドウェル氏夫妻、フィリピン・ペン会長モラレス氏出席。
コールドウェル氏出席のため参会者多し。

「よし田」でソバを食い、風邪気味のため早く帰る。

二月二日

「山の上ホテル」に入るための重いトランクをさげて、上京。

兼坂ビル三階の試写室で新外映「勝手にしやがれ」の試写を見る。ペンの映画委員丸岡明、田村泰次郎両君も一緒。（秘田君（註||秘田余四郎）に頼み、この映画の試写会をペンでやろうというので、見たのである。）

両君と文春クラブへ。田川（註||田川博一）君に会う。

みなで東京会館へ。芥川直木両賞受賞式。（芥川賞受賞者なし）

久しぶりで「おきよ」へ行き、食事。徳田君来る。

銀座へ出る。笹原（註||笹原金次郎・『中央公論』編集長）、川島（註||川島勝・講談社出版部）両君に会う。
バー「アカンサス」へ。（ホテルへ行く気がないので……）

ホテルへ電話。『週刊現代』唐沢明義君が夕方からホテルで待っている。「アカンサス」に来て貰う。

唐沢君と「山の上ホテル」へ。屠所にひかるる羊のごとし。

十二時より仕事。「愛が扉をたたく時」第一回下書。
朝六時にねる。

二月三日

唐沢君来る。

神田のソバ屋でソバを食う。

仕事。

妻、「三喜」で清書。（註||築地の三喜旅館。当時の仕事部屋。）
十枚渡す。

神田の「はちまき」（天ぷら屋）で夕食。

二時まで仕事。

この小説はドタン場まで、何か気がのらないで困った。筋も立たなかった。

二月四日

妻におこされる。

ホテルを出て「三喜」へ。

八枚渡す。

夕方、橋爪（註〳〵橋爪克己）事務所で田辺茂一君に会う。紀伊國屋問題。

田辺君、舟橋聖一君に会うため資生堂へ。「キアラの会」の雑誌を出すための打ちあわせ。――橋爪君は「花蝶」（近藤（註〳〵近藤嘉克）君招宴）へ。

講談社へ行く。『現代』（註〳〵『週刊現代』のこと。以下も同じ）編集長大久保（註〳〵大久保房男）氏に会い、編集室でビールを飲む。

九時、「花蝶」へ。土屋清、池島信平、橋爪君がいる。あとから佐佐木直君（私の同期生、日銀理事）。

今夜は豆まき。

若い妓がレコードで「黄色いさくらんぼ」を踊る。

みなと「おそめ」へ。「エスポール」にも廻る。

終電車に乗るため道を急いで行ったが、左足の膝の関節が痛くて弱った。

病院から戻ったチル（犬）の様子が変なので、そのことを妻に告げる。妻、チルにセーターをかけ
てやる。

二月五日

早朝チル死す。

正午、ソ連大使館でチャコフスキー氏（註）『外国文学』編集長のためのパーティがあつたが、欠席。
三時、プリジストン美術館へ。明日の講演のため、あらかじめスライドを見る。

六時、文芸家協合理事会へ出る。（四時半からの渉外委員会は欠席）

二月六日

二時より、プリジストン美術館で「土曜講座」。エルミタージュ美術館とその所蔵のフランス近代
絵画について語る。

新橋演舞場、鯉風会へ。

近藤氏に会う。佐佐木茂索、大佛次郎氏にも会う。

種々、感あり。

武原はん女の踊りに感動した。地唄舞いでなく、鯉三郎振付の踊り。地方さんは清元の延寿太夫と栄寿郎さんたち。

九時すぎ、約束により新橋駅正面へ。『現代』唐沢君に会う。新橋で露店のおでん屋をやっている寺沢寅男君に会うため。その場所へ行くとまだ出ていない。

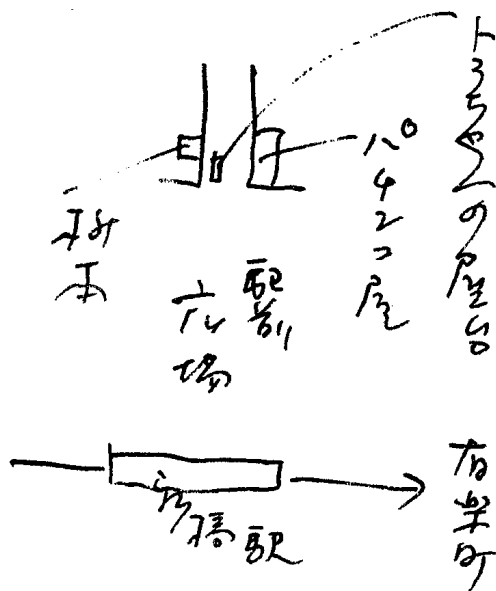
十時まで、ちょっと飲もうと「狸小路」の飲み屋（店の名忘れた）をのぞくと、田辺茂一君がいる。

鈴木貢君がいる。

田辺君酩酊。

十時半、店を出て、寅ちゃんの屋台へ行こうとすると、バー「ロマン」のマダム（「生命の樹」の「陽子」）に会い、つかまって、その店へ。田辺君、唐沢君も一緒。

終電までそこで飲んでしまった。この意志薄弱！



帰ると家に吉行淳之介君と宮城まり子君が来ていた。
まりちゃんに小言を言って、泣かせてしまった。

二月七日

暖か。

遅い朝食をとって、また夕方までねる。

井上光君の遺児悠子来る。高校二年生。背がすらりと高く、ピカちゃんに似ている。

二月八日

十一時、橋爪君と日本精工会長望月氏を訪れる。田辺茂一君来ている。

紀伊國屋問題で懇談。

橋爪事務所で小林（註〓小林庄二）君に会い、満洲の合作社運動について聞く。（「激流」のための資料）

「三喜」で仕事。（『週刊現代』の小説二回目）

チャコフスキー氏、今夜、羽田より帰国。

妻がお土産物を持って、ホテル（日活ホテル）の彼の部屋へとどける。

七時よりホテルのバーで氏の歓送会。それに出席。

ソ連大使も出席。

帰りに加藤周一君から食事を誘われたが、ことわった。

青野季吉、中島健蔵、松岡洋子みなさんと加藤君が「慶楽」へ行く。その入口まで一緒に行く。

「三喜」で仕事。

吉川誠一君、妻とともに来る。三人で帰りに新橋のトラちゃんの屋台に寄った。カンちゃん（註||
小畑寛。雑務を手伝っている老書生）が赤い顔をして（大分のんだらしい）店から出てくるところだった。

「あ、いけねえ」

と、カンちゃんは店に戻った。

おでんの鍋には、タネがいっぱい入れてあった。鍋は——昔はおでんの鍋と言ったら、アカカシン
チュウ（？）だったが、ここの鍋は瀬戸びきで、

「写真の洗いナベじゃないかしら」

と誠ちゃんと言った。

「ガンモと焼きチクを貰おう」

と私は言った。いずれも十円。

焼きチクは原価一本十一円。それを二つに切った奴。

タマゴは二つ、クシにさしてあつて、

二十五円。安い。

安くないと、ダメだとトラちゃんは言う。

酒は二種あつたが、なかみは同じなのだ――

とカンちゃんが、いつか言っていた。値段は違う。客ダネによって更に違う。

前のパチンコ屋の、二階が従業員の部屋になっていて、女の子が窓から外をのぞいている。この女の子たちが、トラちゃんの屋台の大事な客だという。

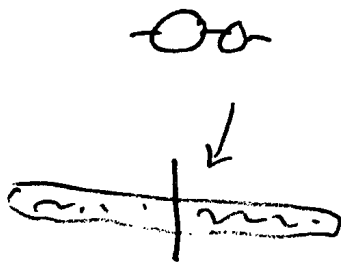
「豆マキのときは、二万円まいたそうですよ」

とカンちゃんが言う。主人が、女の子たちにまいたのだそう。女の子は何十人（四十人とか聞いた）か、ここにとまっている。

カンちゃんは今夜は外泊の予定で、私の家を出たのだが、
「帰りますわ」

と、一緒に新橋駅へ行った。

ホームでカンちゃんが言った。



「パンパンがよく、あの店へ来るんですが、きまって、コンニャクを食べて行く。一本十円のコンニャクを食って、十円おいて行く」

「コンニャクが好きなのかしら」

「コンニャクが一番はらのたしになるんでしょね」

私はいつか新聞で日本のコンニャクがアメリカへ盛んに輸出されているという記事を読んだ。アメリカの女性がこの頃、さかんにそのコンニャクを食うからだという。うまいからか。

そうでなくて、痩せるために食うのだそう。コンニャクは満腹感があって、栄養がない。痩せられる。それで食べるのだという。それを私は思い出した。

二月九日

暖い。

ハエがどこからか出てきて、部屋の中にとんでいた。どこで冬をすごしたのだろうか。

イスフグリが線路沿いの道に咲いていた。昨日は咲いていなかった。

上京。

「三喜」で仕事。

田辺茂一君、いきなり来る。小林（註||小林蝶二）弁護士（紀伊國屋取締役）に会うのだという。そのための相談。